
熊本博物館の歴史とそれに見る これからの地域博物館の在り方に関する考察

植木 英貴

熊本博物館 館長

キーワード：熊本博物館の歴史、地域博物館、人口減少社会、少子高齢化

1 はじめに

熊本博物館は平成 30(2018)年 12 月 1 日、約 5 年間の改修工事を経てリニューアルオープンした。

当館が現在の熊本城三の丸地区に建設され、開館したのは昭和 53(1978)年 4 月であり、世界的建築家黒川紀章氏の設計によるものである。今回のリニューアルは築後約 40 年が経過したことから、施設の老朽化、社会的な変化や進展による展示技術の向上に伴い、新たな施設機能の充実と展示環境の整備を図り、政令指定都市に相応しい魅力ある熊本地域の中核博物館とするためである。

このようなことから、今回のリニューアル事業に際しては、平成 23 (2011) 年 3 月に報告された『熊本博物館のリニューアルに関する検討結果について (報告)』(以下「報告」という。)を踏まえ、平成 24 (2012) 年 3 月に策定された『熊本博物館リニューアル基本構想・基本計画』を基に工事が進められた。

先に述べた報告の中では「熊本市の政令指定都市移行を機に、熊本博物館を政令指定都市にふさわしい総合博物館として生まれ変わらせ、市民や県民、さらには熊本を訪れる観光客にも親しまれる博物館とする」との当館の方向性がすでに示されている。ここで示された方向性で注目されるのは、これまでの社会教育施設としての市民、県民に対する在り方のほかに、博物館が観光文化資源として観光にも寄与することが求められていることである。この方向性は、今後の博物館としての役割や存在価値を考える上で極めて重要な視点がすでに示されていたこととなる。

しかし、報告からリニューアルオープンまでは、すでに 7 年 8 か月を経ている。この間の日本社会の変化をみると、日本全体が人口減少社会に突入するとともに、少

子高齢化がさらに進展し大きな社会問題となっている。

このことは本市においても同様であり、報告ですでに示されている方向性を具体化するうえでは、すでに無視できない重要な問題となっている。

そこで、本稿では地域の中核博物館として発展してきた熊本博物館の設立からの歴史を概観し、それぞれの時代に求められてきた熊本博物館の在り方を振り返り、その活動の歴史をヒントに、人口減少社会、少子高齢化が進展していく中で今後求められる地域博物館としての熊本博物館の在り方を考察したい。

2 熊本博物館の歴史：3 期に分けて

当館は熊本城内に昭和 27 (1952) 年に設立され、平成 31 (2019) 年 3 月まで 67 年が経過している。そこで、本稿ではこの 67 年間を、熊本城内に開設されてから昭和 35 (1960) 年度までを第一期、昭和 36 (1961) 年度に熊本市の花畑町にあった熊本市勸業館に移設し、熊本城三の丸地区の現在地へ新築移転されるまでの昭和 52 (1977) 年度までを第二期、昭和 53 年度の熊本城三の丸地区への移転後から、リニューアル工事のため全館休館となる平成 27 (2015) 年 7 月までを第三期として 3 期に区分し、当館の歴史やそれぞれの時代に求められてきたものを概観したい。また、この 3 期に区分する中で、図 1 で示している入場者数の変化についても考察したい。

2.1 第一期：草創期、熊本城内時代

(昭和 27 年度から昭和 35 年度まで)

当館は、昭和 26 年の熊本市議会第 1 回定例会において「本市は、昭和 26 度において、熊本城内元女子大跡¹に博物館を設置するものとする」²として可決され、設立

準備後、昭和27年2月2日の市議会において博物館条例が可決されている。それを受け、第1館よりも先に同年2月4日に熊本城宇土櫓内に第2館が先に開館し、第1館は同年6月に熊本城内元女子大跡に開館している。

このときの展示資料は、第1館では熊本医科大学学長も務めた山崎正董（やまさきまさただ）氏の貝や古瓦類のコレクションや熊本大学理学部長だった地質学者の松本唯一氏の膨大な岩石と鉱物のコレクションが中心だった。これらのコレクションの集積が熊本博物館建設に向けた機運の高まりの背景にあった³。また、第2館の宇土櫓では財団法人熊本城顕彰会からの寄託品である神風連関連資料や西南戦争関連の資料が展示されていた⁴。

この第一期の期間で大いに注目されることは、先に取り上げた熊本博物館条例の第1条に「博物館法（昭和26年12月1日法律第285号）に基づき⁵」とあることと、設置目的に「本市の教育並びに学術及び文化の発展に寄与するため」という規定があることである。このことは、当館が昭和24（1950）年に制定された「社会教育法（昭和24年6月10日法律第207号）」にちなみ社会教育の精神に基づく施設として計画されたことを表している。また、さらに注目すべきは、当館では博物館法第20条で規定されていた「博物館協議会」の設置を早くも昭和28年11月に行っていることだ。ここに、社会教育施設

としての博物館の必要性と、それを市民とともにどう発展させていくのかという真剣な姿を見出すことができる。

その後、博物館は、昭和34（1959）年4月、熊本城天守閣再建工事に伴い第1館は解体されることとなり休館となり、さらに同35年の熊本城天守閣完成に伴い、同年9月、第2館となっていた宇土櫓を閉館し、天守閣を当館分館とし発足させている。

休館となった第1館は、昭和36（1961）年2月1日、花畑町にあった熊本市勸業館に本館として移転され、この時から第二期となる勸業館時代が始まる。

ここで図1で示した第一期の入場者数の状況を見てみたい。これによると開館した昭和27年度は22万8千人の入場者となっており、昭和28年度、同29年度を除き、昭和34年度までは20万人以上の入場者で推移している。昭和28年度、29年度に19万人前後に落ち込んでいるのは、昭和28（1953）年6月の九州北部地域を中心に発生した豪雨で、熊本市内に甚大な被害をもたらした6・26大水害の影響であろう。しかし、この第一期の毎年度20万人前後の入場者数は、当時、全国公立博物館においても常に6、7位であった⁶。この実績は市民の博物館の社会教育への大きな期待のほか、第2館が熊本城宇土櫓にあったことによって観光客の入場者が大変多かったことが理由となっている。そこで、ここでは博

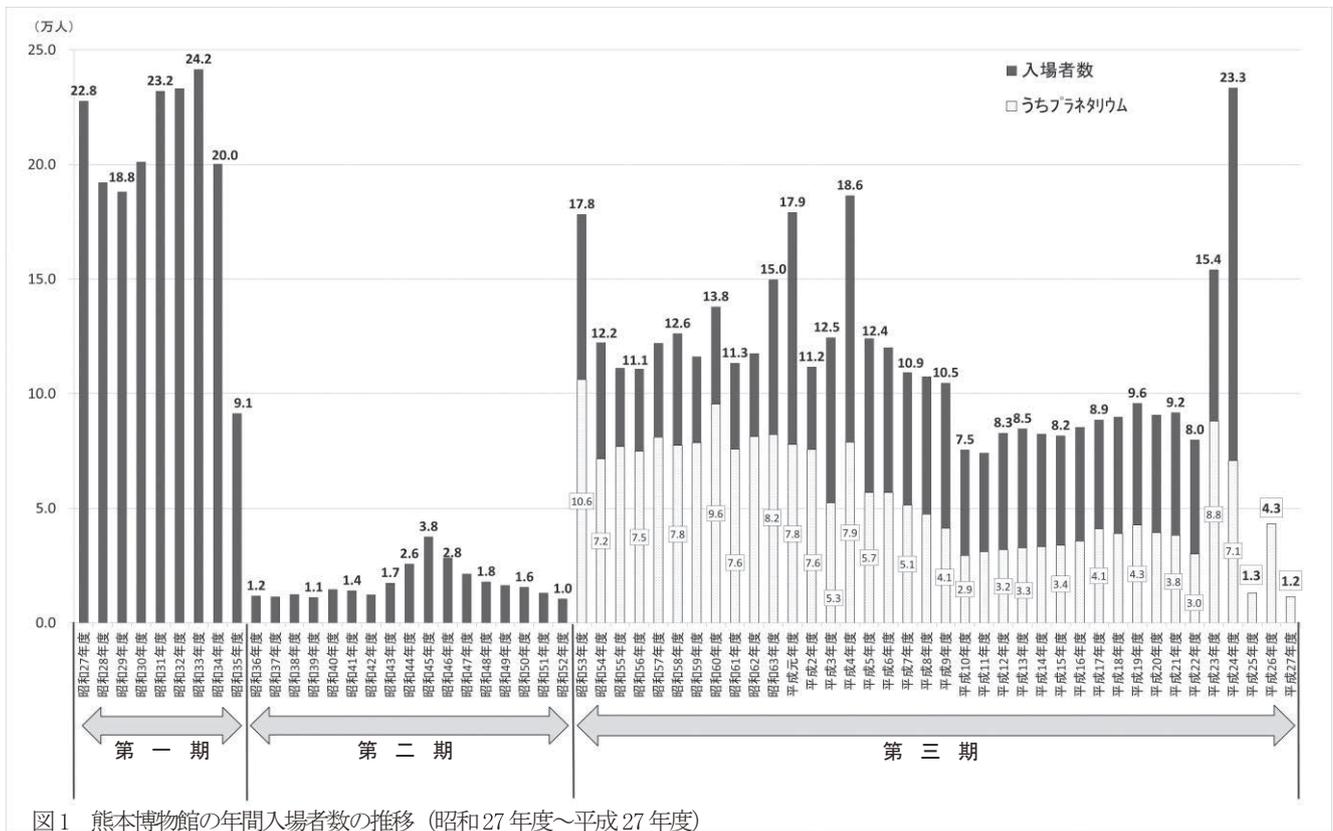


図1 熊本博物館の年間入場者数の推移（昭和27年度～平成27年度）

博物館の観光文化資源としての活用の重要性が見出せる。

2.2 第二期 市民のための博物館づくり、勸業館時代 (昭和36年度から昭和52年度まで)

第二期は、昭和36年2月から始まる熊本市の中心街である花畑町の熊本市勸業館の2階、3階に熊本博物館本館が設置された時代である。熊本城天守閣での展示は第一期のところで触れたように、当館の分館としての運営であった。しかし、分館とは言え天守閣再建に伴う観光施設としての活用としての性格が強かったため、入場者は熊本城へ訪れる観光客でかなり多く、当時のデータを見ると昭和35年度は58万人、昭和40年度は93万人ともなっている。そのため、図1では、第二期は本館のみの入場者数で示している。

この第二期になると第一期当時の学芸員による必至の資料収集の成果とこれに続くその後の学芸員の努力で資料の収集は更に進み、勸業館時代の本館では、民俗資料などの人文系資料、哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類、昆虫等の動物、植物、化石や岩石、物理、工学の資料などの自然系資料の展示が可能となった。一方、分館の熊本城天守閣では、加藤清正関係、細川家資料、刀剣、神風連及び西南戦争関係資料、考古資料などが展示されていた。

この第二期の勸業館時代の大きな特徴は、博物館が中心市街地に整備されたことである。昭和45年前後は勸業館に隣接する熊本交通センターの開業(昭和44年3月)による利便性の向上も図られ、本館には独自のホールも設置され、立地も関係して熊本博物館が市民にとってさらに身近なものになっていく時代である。

また、この期間の活動の特徴は、活発な館外での教育活動である。例えば星を見る会や植物・昆虫の標本づくりなどの講座、植物や昆虫、岩石などの採集会の開催、史跡・文化財の見学会など年間を通じて極めて活発な活動が続けられている⁷。昭和40(1969)年からは市内小中学生を対象に博物館夏季学校も開始され教育施設としての機能が整備されていく。この夏季学校は小中学生には大変好評を博した学習講座となった。また、昭和44(1969)年7月には『熊本博物館友の会』が「市民の知識の向上、親しめる博物館」を目指して発足し、様々な講座、講演会の開催、映画鑑賞会、史跡見学旅行など実施された⁸。この

ほかにもレコードコンサートも盛んにおこなわれている。また、友の会発足に続き同44年11月には、考古学同好会も発足するなど、当館は教育機能だけではなく、実質的に生涯学習の場としての機能を高め、市民に親しまれる、市民とともに発展し成長していく姿を具現化していく。

ここで図1にもどり第二期の入場者数を見ると、博物館本館自体への入場者は、大阪万博があった昭和45(1970)年の3万8千人をピークに、昭和44年から同47年までは年間の入場者数は2万人を超えている。これは、昭和44年の博物館友の会の発足などにもみられるように、博物館活動への市民の関心の高まりの中、当館の開館以来、博物館本館などで開催されてきた自然科学系の展示会と人文系の展示会が、短期間でも市民から興味を持たれるテーマの展示会の開催や本館施設を使ったこれまでよりも会期の長い集客力のある市民のニーズに対応した展示会も多く開催されたからであろう。

表1は、その主な展示会と入場者数を示したものである。これを見ると昭和44年7月のアポロ11号の人類初の月面着陸、昭和45年の大阪万博開催など科学や日本の歴史文化への関心の高まりへの対応とともに子どもたちの学習意欲にも応えようとする姿勢が顕著に表れている。このことは博物館展示活動における重要な示唆を与えている。

しかし、このように博物館の学習施設として、また生涯学習の場としてなど社会教育機能が充実し、展示活動も向上していく一方で、増加していく資料の収蔵やその展示には苦慮していたこともあり、そのことから新たな博物館建設の機運が高まっていくこととなる。

表1 昭和44年度から同46年度までに開催された主な特別展等

年	会期	開催された主な展示会
昭和44年	3.15~4.19	肥後の古墳展 (3,969人)
	9.30~10.12	熊本市科学展 (2,608人)
	10.1~11.2	市制80周年記念行事「古い地図に見る熊本の歴史」展 (4,767人)
昭和45年	2.3~2.8	大名の嫁入道具展 (1,285人)
	3.25~4.19	奈良・平安時代の熊本展 (3,311人)
	4.15~5.2	日本史学習の為の特別展「石器時代から大化改新まで」 (3,543人)
	7.25~8.5	「夏休み学習の為の展示会(交通の歴史を中心にして)」 (1,407人)
	10.20~25	熊本市科学展 (2,639人)
昭和46年	3.13~3.28	特別展「上ノ原のむら」 (7,963人)
	4.17~5.1	日本史学習の為の展示会「原始から古代へ」 (2,154人)
	7.21~8.8	夏休み学習の為の展示会「身のまわりの社会科学学習」 (2,220人)
	10.15~11.21	特別展「日本の教科書」 (5,434人)
	10.19~10.24	熊本市科学展 (2,560人)

() は観覧者数。

2.3 第三期 熊本城三の丸地区への新築移転時代 (昭和53年度から平成27年6月まで)

第三期は、当館が熊本城三の丸地区へ新築移転され新機能を備えた博物館として開館した昭和53年4月から今回のリニューアル工事のため全館休館となる平成27年6月までとする。

日本は昭和30年頃から始まった高度成長時代を経て昭和48(1973)年のオイルショックを経て低成長時代へととなり、昭和54(1979)年を境に物質的な豊かさから、心の豊かさやゆとりのある生活に重きを置く時代へと大きく変わっていく⁹。いわゆる「文化の時代」の到来である。熊本博物館の熊本城三の丸地区への新築移転は丁度この変化の大きな節目となる時期に実現した。

熊本においては昭和51(1976)年3月に熊本県立美術館が開館し、また、昭和28年に市公会堂(現在の熊本市市民会館の前身)に開館していた熊本市立図書館が2度の移転を経て昭和57年11月に現在地の大江に新築移転された。続いて熊本県立劇場も同57(1982)年12月に完成し、この時期、熊本においても新しい文化施設の誕生が相次いだ。

熊本博物館は冒頭で述べたように建築家黒川紀章氏の設計によるものであり、これまで熊本にはなかった斬新な意匠の建物であり、内部には大きな展示空間を持ち、プラネタリウムも併設され、建物内部の展示室天井空間には大きなダクトなどが露出する空間デザインとなっている。

文化施設の建築的在り方については、本館建設後の昭和55(1980)年7月、当時の大平内閣総理大臣が、黒川氏を含む各分野の識者に委嘱しまとめた『文化の時代研究グループ報告書¹⁰』がある。この第2章の5の「地方における文化の振興」の中で、「文化の時代に必要なものは、余暇すなわち時間的ゆとりと並んで、空間的ゆとりである。…公共施設がその地方の街並みや新しく建設される建物の質的水準に影響を与える直接、間接の影響には大きなものがある。施設の建設に当たっては設計、デザインを十分に考慮し、その地域の建築物の文化的水準を先導する役割を果たすよう、努めることが望まれる。」

とあり、熊本博物館の建築は、黒川紀章氏によってこの考え方を先取りしたものであったと考えられる。

新熊本博物館の建物には、大きな吹き抜け空間をもつ地質展示室と理工展示室をはじめ、生物展示室、考古展示室、歴史展示室や民俗展示室、さらには直径16メートルのプラネタリウム施設、そして野外展示場を併せ持つ当時としては最新の展示設備と機能を持った総合博物館となっている。

この熊本博物館の新築移転計画の過程で最も注目されることは、昭和49(1974)年7月に策定された四つの基本構想コンセプト¹¹である。

この四つとは①広域情報型博物館、②市民開放型博物館、③郷土立脚型博物館、④人間密着型博物館を目指すものであり、この考え方が以降、本館の活動理念として受け継がれていくこととなった。

この第三期の活動を見る前に図1に戻り、新築移転によって入場者数にどのような影響を与えたか、その推移

表2 昭和54年度から平成10年度までに開催された主な特別展等

年	会期	開催された主な特別展等
昭和54年度	6.2~6.10	世界の蝶展(入場者不明)
昭和57年度	9.19~10.17	九州古代のまつり(熊本博物館開館30周年記念特別展:8,025人)
昭和58年度	7.23~8.21	未来の電話とロボット展(NTTとの共催により県内各企業から出店協力を得て開催:21,736人)
昭和59年度	8.3~8.12	世界の蝶展(6,781人)
昭和60年度	S61.3.1~3.30	特別展『宇宙の神秘』一掃ってきたハレー彗星(福岡市立少年科学文化会館の協力を得て76年周期のハレー彗星が接近するという世紀的天体現象を中心とした特別展:20,835人)
昭和61年度	8.8~8.11	もりの展交通博物館(船の科学館、交通科学館などの協力のもと古代の丸木舟から現代の航空機など陸・海・空にわたる交通の発達などを主とした特別展(12,501人))
昭和62年度	4.1~5.31	ふるさとの四季展(県内の年中行事を切り絵にした作品展:25,258人)
	S63.3.19~4.3	特別展『上南部のむら』(6,553人)
昭和63年度	4.15~4.24	熊本博物館新館開館10周年記念特別展(期間中の入場者:27,516人) ・4.15~4.17 夢の乗り物博物館 ・4.15~4.17 プラネタリウム特別番組放映 ・4.15~4.17 山野草展 ・4.15~4.17 マイクロマウス大会 ・4.17 ロボットレース ・4.15~4.24 子ども写真教室作品展
	9.16~10.31	特別展『近代熊本のあけぼの』(20,463人)
平成元年度	4.2~4.9	くまもと100年のあゆみ展
	7.25~7.30	市制100周年記念行事『こども科学展』(67,351人)
平成2年度	9.21~10.14	特別展『錦絵にみる西南戦争展』『身近な宇宙展』(9,854人)
平成3年度	H4.3.22~3.29	『新エネルギー展』(35,046人)
平成4年度	4.26~5.10	特別展『夢のプラネタリウムと宇宙科学展』(72,732人)
	8.15~8.23	テクニカルアート展(5,358人)
平成5年度	10.1~10.24	火の国フェスタ'93協賛『肥後の船と人々の暮らし展』(26,279人)
平成6年度	8.12~8.21	『ふれあいロボット展』-おもちゃのロボットからコンピューター・ロボットバンドまで-(13,866人)
平成7年度	7.22~8.13	『天才・科学者レオナルド・ダ・ビンチ展』国立博物館との共催(10,730人)
	H8.3.2~3.17	収蔵品展『遺墨にみる西南戦争』(2,407人)
平成8年度	7.23~8.11	『化石に見る熊本のおいたち』(6,950人)
	8.24~9.1	『蓄音機とレコードの80年の歩み』(2,939人)
平成9年度	10.11~10.26	『明・清名宝と象牙展』(RKK熊本放送との共催:6,235人)
	10.18~11.3	『西南戦争と熊本』熊本城・東竹の丸一帯で開催
平成10年度	7.18~8.2	熊本博物館収蔵資料企画展『世界の蝶』(4,504人)
	8.12~8.16	企画展『星座物語原画イラスト展』(1,254人)

※熊本博物館改修工事(平成10年9月1日~平成11年5月31日)により平成11年1月から5月まで休館
()は観覧者数。

をはじめに確認しておきたい。

新築移転した昭和 53 (1978) 年度は、それ以前の 1 万人台で推移していた入場者数が一気に 17 万 8 千人に急増している。同年 4 月 1 日に開館し、同年 7 月 19 日には入場者は早くも 10 万人を突破したという記録がある。プラネタリウムという新たな施設も大変な人気で、入場者の 6 割はこれを観覧するという状況で、斬新な意匠の建物とあわせ、館内は吹き抜けの広い空間などを生かし東洋象の実物大復元模型や五家荘ジオラマ、理工科学関係の展示などこれまで見ることのできなかつた展示技術も駆使され、当時の市民は魅了されたことが十分に想像できる。その後の 20 年間は毎年度 10 万人以上の入場者が訪れている。新しい博物館では、特別展示室 (300 m²)、地階プラネタリウム前のロビー (180 m²) と野外展示場 (110 m²) といった施設が利用され、活動の幅も広がっていく。

展示活動を概観すると、昭和 58 (1983) 年度には「未来の電話とロボット展」が開催され、約 2 万 2 千人の観覧者が訪れている。また昭和 60 (1985) 年度は、昭和 61 年 2 月 5 日のハレー彗星大接近が話題となった年で、『宇宙の神秘』- 帰ってきたハレー彗星 -」展が開催されている。一つは近未来への誘い、もう一つは宇宙へのロマンや神秘をテーマにして、多くの市民の興味を掻き立てている。また、平成元年度では、市制 100 年記念行事として『こども科学展』が開催され約 6 万 7 千人が来館し、平成 5 (1993) 年度には火の国フェスタ ‘93 協賛事業『肥後の船と人々の暮らし展』で約 2 万 6 千人が訪れている。またその間、平成 4 年度にはプラネタリウム新機種の導入に伴い特別展が開催されており、『夢のプラネタリウムと宇宙科学展』が開催され 7 万人以上が訪れている。これらの展示会を見ると、全市をあげた大規模イベントの一環事業としての相乗効果が発揮されているとともに、博物館機能の向上による魅力アップ効果が来館者増へつながっている。これらの点は、博物館がいかにして多くの入場者を引き付けるか大きな示唆となる。

もちろんこのほか、新しい博物館では、勸業

館時代に引き続き観察会や見学会、講座等も活発になっていくが、この間、昭和 57 年には近隣にあった旧家庭裁判所跡の建物が当館に移管され「熊本博物館古京町分館」となり、収蔵庫としての活用のほか学習室や会議室として利用できるスペースを得たことから、天文教室、昆虫教室をはじめ、考古学講座、歴史講座、民俗講座などの更なる開催の場が拡充されていく。

表 3 平成 11 年度から平成 27 年度までに開催された主な特別展等

年	会 期	開 催 さ れ た ま い な 特 別 展 等
平成 11 年度	9. 18～9. 26	マセマティカル・アート展 in 熊本 (熊本博物館・九州東海大学・東海大学第二高等学校・東海大学教育開発研究所・熊日新聞社主催：20,047名)
	10. 8～11. 3	「加藤・細川両家と熊本城」 (5,110名)
平成 12 年度	10. 21～11. 5	古写真にみる熊本の明治時代 (熊本城内東十八間櫓：7,417人) くまもとお城まつり協賛
	H13. 3. 16～3. 31	「幻の二ホンオオカミ復元」展 (2,598人)
平成 13 年度	7. 21～8. 19	野外で出会う花たち～フラワートレッキング入門～ (3,823人)
	H14. 3. 9～4. 7	電気と光のおもしろ実験工房 (全国科学館連携協議会巡回展：4,884人)
平成 14 年度	7. 21～9. 22	熊本博物館 50 周年記念「収蔵資料公開展～博物館と私たちの暮らし～」 (第 1 部) 収蔵資料にみる熊本の自然と科学 7. 21～8. 18 (第 2 部) 収蔵資料にみる熊本の歴史と生活 8. 24～9. 22
平成 15 年度	9. 19～10. 19	まつりのかたち―庶民が伝えた祈りの造形― (4,024人)
平成 16 年度	7. 24～8. 22	毛利宇宙飛行士の部屋 (全国科学館連携協議会巡回展、日本宇宙少年団、九州東海大学、崇城大学等共催：10,504人)
平成 17 年度	H18. 2. 18～3. 21	刀剣 一その美と肥後の歴史との関わり― (4,908人)
平成 18 年度	7. 22～8. 27	身近な生きものとわたしたちへエゴとエコと生態系～ (9,390人)
平成 19 年度	7. 21～8. 26	世界のチョウ展～幻の蝶～ (7,340人)
	9. 8～10. 14	幻の郷土玩具展―天草土人形・宇都張子を中心に― (3,004人)
	12. 15～H20. 1. 20	文化庁共催『発掘された日本列島 2007―新発見考古速報展―』 (5,541人)
	12. 6～H20. 1. 27	『熊本城築城 400 年祭特別展示 発掘された本丸御殿』 (熊本城数寄屋丸 2 階御広間：21,262人)
平成 20 年度	4. 1～5. 6	築城 400 年記念熊本城特別展示 ア「熊本城と細川家 ～忠興・忠利・綱利・重賢～」 (天守閣 3 階：221,070人) イ「西南戦争と熊本城」(天守閣 4 階：221,070人) ウ「熊本にいきづく生人形」(数寄屋丸 2 階御広間：30,730人)
	7. 19～8. 31	新館開館 30 周年記念特別展 「サメ・海のハンター ー有明海のサメと歯化石ー」 (15,173名)
	9. 13～10. 13	昭和の思い出 (メモリーズ) ～回想のスズメから (熊本大学五高記念館と共催：4,756人)
平成 21 年度	6. 20～7. 20	「台風がやってきた！」 (日本科学協会巡回展：6,506人)
	8. 1～8. 31	特別展 「金峰山の生きものがたりといしものがたり―金峰山を探検しよう―」 (5,091人)
平成 22 年度	9. 18～10. 18	企画展「横井小楠とその時代」 (2,318人)
	7. 17～8. 29	特別展『よみがえる清正一戦国武将加藤清正への祈り―』 (8,182人)
	9. 12～10. 11	企画展 「九州の四大カルデラを探る ～松本唯一・岩石と鉱物コレクション～」 (4,116人)
平成 23 年度	H23. 3. 26～5. 8	プラネタリウムリニューアルオープンに合わせた企画展 「ガリレオの天体観測から 400 年―宇宙の謎を解き明かす―」 (16,602人)
	7. 17～8. 28	九州新幹線全線開業記念事業特別展「～サンゴ礁の化石たち～」 (15,623人)
	9. 10～10. 16	九州新幹線全線開業記念事業企画展 「西海道と肥後国―出土品からみた古代のくまもと―」 (3,719人)
平成 24 年度	11. 23～11. 27	企画展 「おかえりなさい！はやぶさ 小惑星探査機『はやぶさ』帰還カプセル特別公開」(宇宙航空研究開発機構協力：17,893人)
	4. 28～6. 10	熊本博物館開館 60 周年記念『肥後の博物学・科学技術―細川重賢の本草学へ近代テクノロジーへ―』 (4,793人)
平成 25 年度	7. 21～9. 23	熊本県・米国モンタナ州姉妹提携 30 周年、政令指定都市くまもと誕生記念 「恐竜展 2012 in くまもと」 (恐竜展 2012 in くまもと実行委員会：137,276人)
	—	平成 25 年 7 月よりリニューアル準備のため休館
平成 26 年度	—	※プラネタリウムを平成 26 年 4 月から平成 27 年 6 月まで放映
平成 27 年度	—	※平成 27 年 7 月より全館休館する。

() は観覧者数。

また、この時期、注目されるのは「市民に親しまれ、楽しく学べる博物館づくり」を目標に、平成2年度から始められた見学者へ展示解説する「案内ボランティア」の育成事業に取組み、平成3(1991)年4月に案内ボランティア『博萌会』が発足し、同年10月から本格的な活動が始まったことである¹²。新館建設の時、策定された四つのコンセプトのうち、言うならば「広域情報型博物館」「市民開放型博物館」の姿が具現化されていく。

しかし、平成10(1998)年度と11年度にかけて施設設備の老朽化に伴う改修工事が行われ、この時を境に入場者数が10万人弱と低迷が続くが、この間も表3で示しているように様々な展示会は積極的に開催されていた。

平成11(1999)年度では、地元大学や高等学校などとの共催で「マセマティカル・アート展 in 熊本」という数学を身近に楽しむことを目的とした珍しい展示会が開催され約2万人が訪れている。

このほか、平成14(2002)年度には熊本博物館50周年を記念した「収蔵資料公開展～博物館と私たちのくらし～」展が開催され、平成20(2008)年度には新館開館30周年記念特別展として「サメ・海のハンター - 有明海のサメと歯化石」が開催されるなど、記念事業のほかに学芸員の調査研究を踏まえて、「まつりのかたち - 庶民が伝えた祈りの造形(平成15年度)」、「金峰山の生きものがたりといしものがたり(平成21年度)」、「よみがえる清正 - 戦国武将加藤清正への祈り - (平成22年度)」など、それぞれのテーマと切り口を持った郷土の民俗文化、自然や風土を掘り下げた展示会が開催されている。このほか平成19(2007)年度と20(2008)年度には熊本城築城400周年を記念した特別展も開催されている。

また、平成23(2011)年度には、小惑星探査機『はやぶさ』の帰還を記念した「おかえりなさい! はやぶさ」が開催され、わずか5日間で1.8万人が訪れており、平成24(2012)年には、熊本県とモンタナ州姉妹提携30周年及び本市の政令指定都市移行を記念し「恐竜展2012in くまもと」が開催され、約13万7千人の入場者を得ている。これらの展示会ではどちらも子どもから大人まで幅広い年齢層に魅力と興味のあるテーマであり、このようなテーマ選定の視点も忘れてはならない。

当館の博物館活動では、展示会開催のほか、観察会、講座等も引き続き実施されたが、平成10(1998)年度か

ら博物館で所蔵されている資料を小学校や市民センター(当時)等で展示するアウトリーチ活動となる移動博物館が新たに開始され、平成24(2012)年まで継続された。

このような中で、熊本博物館友の会においては、運営面における学芸員への負担が増大していったこともあり、その対応のため、友の会の設立目的¹³も勘案し、平成14(2002)年度から会員の自主運営へと形態が変わり、会の活動が続けられた。しかし、新規入会者の減少と会員の高齢化等により運営の継続が困難となったことから、平成23(2011)年3月で解散となっている¹⁴。また、平成3年度から継続して活動が続けられてきた案内ボランティア『博萌会』もリニューアル準備に伴う博物館休館によってではあるが、平成25年度末で解散となっている。博物館活動において市民の参画・協働は重要な事項であり、継続可能な運営体制づくりが課題であることが示されている。

施設機能の面では、平成23年3月に3機種目となる最新鋭のプラネタリウムが導入されている。

しかし、築後30年を過ぎ、全体的な施設機能の老朽化とともに、社会の変化や進展により新たな展示手法も求められるようになってきた。

そのため、平成22(2010)年度から熊本博物館のリニューアルが本格的に議論され、平成23年度にリニューアルに向けた基本構想及び基本計画策定が進められることとなった。そして、平成25(2013)年7月からリニューアル工事準備のため一部休館となり、平成27(2015)年7月から全館休館し本格的な改修工事に入った。当初は同29年秋のリニューアルオープンが予定であったが、平成28(2016)年熊本地震の影響で一年遅れることとなり、平成30(2018)年12月1日にリニューアルオープンした。

3 これからの地域博物館としての在り方

第2章において熊本博物館の歴史を3期に分けて概観した。この歴史の中には様々な活動がおこなわれており、その事例から得られる教訓も多い。

そこで、本章では、それらの事例や経験から得られる事項を基に、人口減少社会、少子高齢化が進展していく中でのこれからの地域博物館の在り方について考察したい。

3.1 人口減少社会への対応について

(1) 観光文化資源としての活用

昭和 27(1952)年度から同 35 (1960) 年度においては、図 1 で見られるとおり、毎年度 20 万人を超える入場者となっている。この時は、熊本城天守閣の再建前で宇土櫓が熊本城観光の目玉となっており、第 2 館の宇土櫓への入場者が加わり全国有数の入場者数を記録している。

天守閣再建後は、平成 30(2018)年 3 月の博物館設置条例改正による熊本城天守閣分館廃止まで、天守閣が博物館分館としての機能を有していた。しかし、本稿では、博物館分館入場者が熊本城観光者と区別が困難なため図 1 での入場者数には、第二期以降その数は含めていない。

しかし、第一期の入場者数でわかるように、観光文化施設としての魅力を高め、博物館が観光文化資源の一つとなる必要がある、そのことで、多くの観光客を入場者として呼び込むことができる。このことは、人口減少による経済縮小への対応策としての交流人口増加策に寄与できる。

(2) 外国人観光客への対応と地域文化のブランド化

観光文化資源として今後博物館を生かしていこうとするならば、インバウンド対策としても外国人に対して魅力ある施設にすることが必要である。外国語での対応はもちろんである。

地域の総合博物館であればこそ、その地域の歴史、自然、風土を融合した形で見せることができる。外国人観光客にそれらに対し理解を深めてもらうことは博物館の使命であり、博物館で理解を深めてもらった歴史や文化を、訪れた地域の観光ポイントや食、体験、お土産などに関連付け、地域のブランド化にも貢献する必要がある。

そのためには、博物館の中にも観光案内機能も設けるとともに、単館ではなく近隣の美術館、資料館等ともネットワークを図り、地域の魅力を連携して発信する展覧会やイベントも実施し、共同して地域文化のブランド化を図っていくことも重要ではないか。そのことによって文化施設としてだけでなく、観光振興面での役割も広がっていく。

(3) 博物館の立地の弱点は魅力で克服

当館は熊本城本丸の北側、三の丸地区にあり、中心市街地からも離れており、立地に弱点があると言われる。

しかし、第三期となる昭和 53 年度の新築移転以降の入場者数を見ると、移転後の最初の年は約 1 8 万人、その後も 1 2 万人以上で続いている。

この理由は前章で述べたように、時代における文化的水準を先取りするような建築や内部空間とプラネタリウムといったこれまでにない施設、斬新な技術を駆使した魅力ある展示手法にあったといえる。

このことから、市民にとって魅力ある施設として常に機能し、時代を先導するものとして機能し続けることができるかということが重要であることが分かる。また、同時に地域博物館として存続するためには時代のニーズに敏感に活動することも必要である。

この点においては、第二期の勸業館時代には、中心市街地にあり立地の点では問題なかったものの、当時の博物館はあくまでも仮の施設であり、施設機能面で新築移転後の施設機能には及ぶはずもなく、入場者数においては中心市街地という立地の良さを生かすに欠けたことになる。そこで、先に述べたように第三期の入場者数から、立地の問題は、博物館としての魅力をどう向上させ、維持していくかによって克服できるのではないかと。

3.2 少子高齢社会への対応

熊本博物館の歴史から、少子高齢化への教訓を学ぶことは多い。熊本博物館は昭和 27 年に博物館法に基づき設置された施設である。博物館法は社会教育法に則って社会教育施設として位置付けられているからである。

昭和 44 (1969) 年の当館館報¹⁵の序においても当時の館長事務取扱だった田尻 進氏が「社会教育の一環として重要な使命を達成すべく努力を重ねてまいりましたが、最近市民の博物館或いは学校教育の成果をあげるすぐれた機能をもった博物館の必要性が重視せられ、博物館の建設を検討いたしております。」と述べられており、当館は、当初から社会教育施設としての機能や学校教育への寄与が目指されており、十分な示唆が与えられている。そのことを考えながら考察したい。

(1) 博物館でしか体験できない子どもたちへの学習の場づくり

特に第二期となる勸業館時代になると学芸活動も、星を見る会、植物・昆虫の採集会、文化財見学会など誰も

が参加できる活動が活発となっていった。また小中学生を対象とした夏季学校の開催など体験学習を中心とする学校現場では行いにくい博物館ならではの機能と人材を生かした活動が進められ、第三期になっても積極的に活動が進められていく。

地域の博物館として、様々な体験を通して学習できる場の提供は、これから進展していく少子化の時代において博物館機能としてますます重要となっていくだろう。

その際、学校や保護者だけでは子どもたちに体験させにくい事項を学芸員が掘り起こし、それを積極的に体験できる場をつくっていくことが必要となる。

(2) 高齢者だけでなく働く世代のニーズにも対応

これまで当館では、各分野の多様な講座、教室、イベント等を行ってきた。しかし、今後の在り方を考えると、高齢者向けの身体等にも無理のない講座や教室の開催も博物館活動として必要であるが、「人生 100 年時代」と言われる中で、高齢者だけでなく、20代、30代、40代、50代といった働く世代のニーズに合った博物館の活用、例えば新たな知識を得る場、深める場、特に学び直しの場、自己実現の場とすることも求められる。

特に一番博物館に来る機会の少ない年齢層をターゲットとしてテーマ等を工夫した講座、イベントの開催など、木目細やかな対応も必要となろう。そうすることによって地域博物館としての存在価値も高められ、博物館を身近に感じてもらい、リピーターやファンも獲得できる。

また、そのほか、博物館に来館できない市民等を対象に博物館学習情報の提供も進めていく必要もあろう。

(3) 持続可能で開かれた市民参画・協働の体制づくり

市民に親しまれ、市民とともに歩む博物館としての発展は、今後の地域博物館として重要な要素である。

当館においては、第二期で見たように「市民の知識の向上、親しめる博物館」を目指し、昭和44年に「熊本博物館友の会」が発足している。また同時に各講座から発展した同好会も発足するなど、市民に親しまれる博物館活動が進められてきた。また、第三期には館内ボランティア活動も盛んとなり、市民の手による博物館活動支援が活発に行われた。

このような博物館と市民との関わりの歴史を踏まえると博物館の発展のためには市民の力が不可欠であること

は明らかである。

しかし、人口面でも減少していく時代を迎える中、行政内での業務の複雑化・高度化と業務量の増大等を考慮すると、博物館運営経費の増加や職員増も困難となるだろう。今後は第二期、第三期のように会の運営に職員が直接関わっていくことは難しくなっていく。そこで、市民の博物館を通じた活動と博物館自体の活動の質の向上の両立を図るためには、市民協働・参画の理念の中で市民支援組織等の在り方を検討し、その組織と博物館との役割分担を明確にし、それぞれが継続可能な体制を確立していくことが必要と考える。

そのため、本館においても博物館友の会、ボランティア制度などのパートナーシップ体制などを過去の経緯も検証しながら、継続できしかも多くの市民に開かれた体制づくりをしっかりと進めていく必要がある。地域の博物館の発展と成長、そして博物館が市民にとって存在価値を高めることにおいては、このことが最も重要な点である。

(4) 幼児を連れてきて安心して楽しく学べる場

熊本博物館には小さな子どもたちも楽しめるプラネタリウムも設置されている。このプラネタリウムのほかにも子どもたちが安全に、安心して体験しながら遊び学べるコーナーを設けることも博物館には必要ではないか。例えば、土器のパズルや糸電話で会話ができる遊戯とか、植物や動物の模型で遊んだり、ロボットと遊んだりできる施設があれば、博物館は子どもにとって、歴史や科学、自然などをテーマに遊びの中で学べる遊園地のような場所になる。また、家族や友達で触れ合う時間づくりに貢献できる。これからの博物館には重要な機能となろう。

3.3 さらに地域博物館の存在価値を高めるために

(1) 魅力ある展覧会の開催

第二期の展覧会活動は勸業館施設を主に活用しながら、様々な展覧会活動が行われている。

この展覧会活動については、表1でその一部を示したが、勸業館内の展示会場では手狭でその規模においては比較的小規模にならざるを得なかったようだ。しかし、昭和46年3月に開催された特別展「上ノ原のむら」では約8千人の観覧者を獲得している。

また、第三期に入ってから、歴史関係のほか科学や

宇宙への興味をとらえた展覧会に多くの観覧者が訪れている。また、市制 100 年、博物館開館記念事業、熊本城築城 400 年記念と冠された事業が多くの観覧者を呼んでいる。これは、記念事業の一環として行われたもので、関連事業との相乗効果で話題となり、広報効果も高まり市民の関心も高まったのであろう。このように単独展としてではなく、大きな事業の一環として開催することも博物館活動事業としては今後も貴重な教訓となる。

また、近年では子どもから大人まで人気の高い「恐竜展」「小惑星探査機はやぶさ」に関する展覧会に多くの観覧者を呼んでおり、その時代のニーズや関心、興味や話題を敏感に反映し、展覧会のテーマを決定していくことも必要であることが分かる。特に展示会開催は、普段博物館に来る機会がほとんどない市民に対しても来館のきっかけとなることも十分に考慮すべきである。

(2) 文化の創造、まちづくり、行政施策への寄与

博物館は、美術館や劇場と同じように新しい文化創造の場所であり、発信拠点であるという認識を運営側が強く持つことが必要である。郷土の歴史、文化、自然など多くの英知と知的財産が蓄積された場所である。この蓄積を基盤に未来を創造していくという意識が博物館には特に重要であろう。そこには新しい文化創造のための種もあり、まちづくりのアイデアも秘められている。

博物館がそれら蓄積されたものを発信し、まちづくりをはじめ、行政施策のためのエビデンスを提供する場となることも博物館の役割として求められる。博物館は単に資料や知的財産を蓄積させていく静的な場所という認識を博物館側も捨て、動的な活用を図っていくべきである。

(3) 常に魅力ある施設として機能を維持し続けること

第三期の後半では、図 1 に見られるように前半から比較すると博物館への入場者は少なくなっている。しかし、博物館が活動を怠っていたということでは決してない。それは、第三期の活動の歴史の中で見てきた通りである。

ここで言える入場者低迷の原因は、経年による施設の老朽化と展示技術の進歩による常設展示の魅力の減少、科学技術の進歩の速さに追いつけない理工系展示ではなかったか。収蔵物の展示は素晴らしくとも、市民に対して博物館に変化がなく魅力の少ないものとして映るよう

になっていったのではないだろうか。そのため入場者の伸びにつながらなかったのであろう。「いつ来ても同じ展示」として見られるということであろう。しかし、実際は常設展示においては一定の期間毎に展示替えを行いながら更新を行っており、どこの博物館も同じ状況である。

そうであれば、その展示替えする毎に、その変化のポイントや見所を話題として市民にしっかりと伝え、動いている博物館としてアピールすることがまずは重要である。そのためには、展示替えにまつわる講座、教室、イベント、催しなど積極的に企画していくことも一つの手段である。

また、博物館には年々新たな収蔵品が加わっていく。同時に、展示技術も進歩し、見やすく市民の興味のわく展示手法も開発されていく。そのため、総合博物館としてのメリットを生かした常設展示の魅力を維持、向上させていくためには、常設展示に新たな収蔵品も加えながら、時代の進歩にあった展示へと一定期間ごとに改修していく計画を立てておくも必要であろう。

(4) ICT 技術の活用による双方向の情報発信

市民・県民をはじめ、国内外への情報発信は、言うまでもなく今後さらに重要となっていく。そのような中で、様々な広報媒体や SNS などの活用はもちろんであるが、ICT 技術を活用した遠隔機能を利用し、学校や福祉施設等々、様々な施設で博物館学習あるいは学芸員との情報交換などを行うシステムの開発と活用を広げていくことも必要である。このような技術を用い博物館活動の範囲を広げていくことは、その参加者がさらに博物館の魅力や楽しさを深めることになるとともに、参加者自身が主体となって博物館の魅力や楽しさを多方面に発信し広げていってもらいたいということも期待できる。そのような意味でも、今後、双方向の情報発信を意識した取り組みがさらに重要となろう。

4 終わりに

国立社会保障・人口問題研究所が平成 29 (2017) 年 4 月に発表した「日本の将来人口推計 (平成 29 年推計)」によると、前回の推計と比較して人口減少の速度や高齢化の進行度合いは緩和されたとされるものの、平成 27(2015)年の国勢調査による日本の人口 1 億 2709 万人は 50 年後の 2065 年には 8,808 万人へ減少するという。

また、そのうち年少人口（0～14歳）は1,595万人から2065年には684万人となり、総人口に占める割合は12.5%から10.2%となる。また、老年人口（65歳以上）は3,387万人から2042年に3,935万人とピークを迎え、その後2065年には3,381万人となる。高齢人口の割合は平成27(2015)年の26.6%から38.4%になり、2.6人に一人が65歳以上となるという。私たちが想像できない人口減少社会の進展と、少子高齢化の速さであり、改めてその深刻さを認識させられる。

本稿では、今後のこのような急激な社会状況の変化の中で地方博物館が地域の中でどのように時代に応じた博物館としての価値を見出し、どのようにしてその存在価値を高めていくべきか考察してみたものである。

そのような中で本稿では、他の地域博物館の活動事例を参考にするのではなく、熊本博物館の歴史を振り返り、あえてその中からこれからの地域博物館としての当館の在り方を探り出してみようと試みてみた。なぜなら、戦後すぐに社会教育の在り方が問われ、戦後の復興、そして高度成長時代と続き、人口も増加し、社会は豊かになり、そして成熟社会となって、現在があるわけである。

熊本博物館は、このような時代背景を踏まえ、時代の要請、市民のニーズに応じて活動を続けてきたものである。この生の歴史から学ばずして、これからの厳しい人口減少社会、少子高齢化における地域博物館としての当館の在り方のヒントがあろうはずがないと考えたからである。もちろん、本稿における見方、考え方だけでは不十分であるとの批判は当然であろうが、それは今後の研究課題となろう。

しかし、熊本博物館の歴史を辿ることで、その歴史から学んだ今後の博物館の在り方に対する教訓は多くのものがあつた。当館の開設当初から支え続けてこられた職員、学芸員に敬意を表するとともに、当館の発展のためにご理解、ご支援をいただいた市民の皆様や関係者の皆様に心から感謝申し上げます、本稿の終わりとしたい。

〈参考文献・資料〉

- 1 熊本市立熊本博物館館報 No.1 (1969)～No.30 (2018)
- 2 熊本市 (1997)『新熊本市史』通史編第8巻・現代Ⅰ、第9巻・現代Ⅱ
- 3 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口(平成29年推計)』平成29(2017)年4月10日公表

- 1 熊本女子大学は、熊本城内の元第六師団司令部跡を仮校舎として昭和25年5月まで使用していた。
熊本市 (1997)『新熊本市史』通史編第8巻 現代Ⅰ p522を参照。
- 2 熊本市立熊本博物館 (1972)『熊本博物館館報特集—20年のあゆみ 1972No.2 (20周年記念号)』p 5
- 3 熊本市 (1997)『新熊本市史』通史編第8巻・現代Ⅰp539を参照。これらのコレクションは現在も熊本博物館収蔵品の中核を成しており、今回のリニューアルオープン記念展において改めてその一部を展示している。(会期：平成30(2018)年12月1日～同31(2019)年4月7日：リニューアル記念展示パンフレット『記憶を未来へつなぐ博物館』参照)
- 4 熊本市 (1997)『新熊本市史』通史編第8巻・現代Ⅰp540、541を参照。
- 5 熊本博物館は、文部省告示第13号により昭和27(1952)年4月14日に「博物館相当施設」に指定される。そして昭和30(1955)年2月9日に「登録博物館」となる。
- 6 熊本市立熊本博物館 (1972)『熊本博物館館報特集—20年のあゆみ 1972No.2 (20周年記念号)』p 1
- 7 熊本市立熊本博物館 (1972)『熊本博物館館報特集—20年のあゆみ 1972No.2 (20周年記念号)』p p.10～35
- 8 熊本市立熊本博物館 (1972)『熊本博物館館報特集—20年のあゆみ 1972No.2 (20周年記念号)』p p.36～38
- 9 内閣府「国民生活に関する世論調査」参照。
- 10 文化庁「文化の時代研究グループ報告書」昭和57年7月11日 p79
- 11 昭和49年7月に策定された熊本博物館基本構想コンセプトの4つの詳細①次のとおりである。
① 広域情報型博物館 (KEY MUSEUM)：地域住民及び来館者

のために知的情報を提供することであり、まず、基本的に、熊本という地域に関する事象・事象に関する情報、そして、より広く関連情報を収集、分類、整理、蓄積、検索、提示といった機能をシステム化し、運営していくこと。

② 市民開放型博物館 (OPEN USEUM)：KEY MUSEUMとの関連で、博物館の活性化は、大いにこれに関わっているといえる。また、これは地域住民、他地域からの見学者、研究者といった、利用者側の立場に立って、運営者側との相互コミュニケーション活動を意図している。

③ 郷土立脚型博物館 (CIVIL MUSEUM)：地域の自然環境(風土)、歴史を通じて、現在を見つめ、未来への展望の中で、いろいろな問題や現象を考え、解決の道への役割を持たなければならぬ。

④ 人間密着型博物館 (BE HUMAN MUSEUM)：世の中のあらゆる事象・事象は、人間生活の営みの過程における必然的現象としてとらえることができ、それを理解することは、人間生活を理解することにはかみならない。博物館は、つねに全体とのかかわりの中で、今後の生活をより豊かに発展的にしていくために、人間を考え、生活の知恵を創造することに役立たなくてはならない。

- 2 熊本市立熊本博物館 (1994)『熊本博物館館報No.6 平成6年度版』p p.75～81
- 3 熊本博物館友の会会則 (昭和50年5月1日施行)の第2条に会の目的として「博物館の事業に協力し、博物館の普及発展に寄与するとともに、会員相互の知識の向上及び親睦を図ること」と謳われている。
- 4 熊本市立熊本博物館 (2011)『熊本博物館館報No.24 (2011年度報告)』p p.22～23
- 5 熊本市立熊本博物館 (1969)『熊本博物館館報 1969 No.1』序